

シンポジウム 8：医療と福祉の協働が起こす小児在宅医療のパラダイム転換 —病院・病気から地域・生活へ

演題名	生きにくさ育ちにくさを何とかしたい —相談支援機能を持った訪問看護の実践—
-----	--

概要

乳児死亡率は低下し、多くの子ども達が元気に育つその一方で、医療機器、医療的ケアに依存して育っていく子ども達も増えている。その子ども達は長期入院を余儀なくされ、長きにわたり家族のもとに帰れず、育ちの環境には程遠い病院で過ごすことになる。長期入院は子ども達にとっても辛く淋しい体験であり、親にとっても家族が家族になりきれないような時間の流れを作る。その長期入院で過ごす病院側も、救命と治療に集中してきた病院中心の医療システムではこのような子ども達の育ちや家族ケアまでは受け止めきれなくなっている。子ども達には未来があり可能性があり、今何も起こらなければ生きられるというような思いから、病院の中で命を守り続けたいと感じるのも当然のことである。しかし、もう一歩、前向きに考えると、家族のもとで暮らしながら、同じような治療成績も上げられ、発達も順調に進み、家族の成長も共に感じる事が出来るのならば、在宅を選択するというのはどうだろう。在宅医療、地域医療は、その最小単位である家族を支えて、0 歳～100 歳まで、健康に暮らすために、その地域にあった文化をすることである。子ども達は3 歳になれば幼稚園 6 歳になれば小学校、義務教育が終われば、進学就職と、それぞれの道を歩む。今、私たちの目のまえにいる子ども達は、大人になったらどんな職業に就き、何が得意で、どんな風に生きていくのだろうか？そんなことを考えながら、福祉と共働して事が重要である。在宅医療・在宅ケアは、2000 年にスタートした介護保険法を基礎として構築されている。しかしそれらは暮らしの中の要素のほんの一部である。救命と治療に集中してきた病院中心の医療システムの延長線上にある感は否めない。保育、療育・教育・就労など地域で暮らす子ども達の中に当たり前に入り込んで育っていく小児や若年成人の在宅医療・在宅ケアには、もっと複雑に絡み合った顔が見える連携が必要である。多職種と共働きコミュニティービジネスとして経済的効果や人材を輩出しながら、地域に根付いた仕組みとをもち、パラダイムを作っていきたいと考える